

監修委員 井上靖 石森延男 更科源藏

編集委員 加藤多一 木原直彦 西田良子 和田義雄

第六卷

北海道児童文学全集





北海道児童文学全集

第六卷

立風書房



北海道児童文学全集 第6巻

21cm



昭和五十八年十一月一日初版第一刷発行

著者代表―前川康男

発行者―下野博

発行所―株式会社立風書房 東京都品川区東五反田三十一六一八

電話東京四四七―一一九一 振替東京五―七四四九三

本文―信毎書籍印刷株式会社

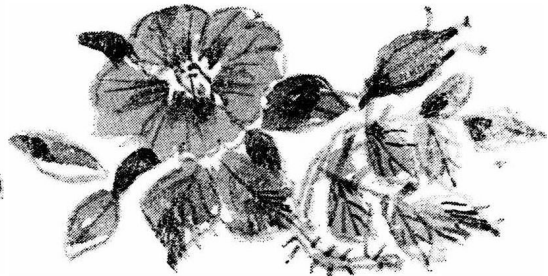
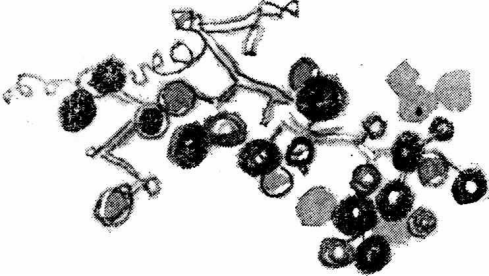
製本所―株式会社難波製本

表紙・箱・絵印刷―株式会社廣濟堂

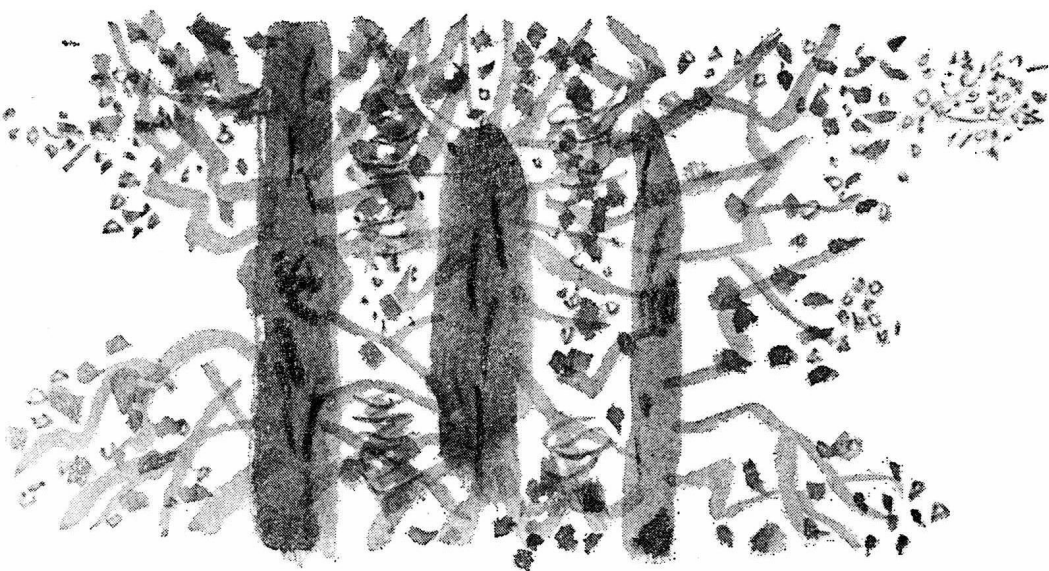
製版―江戸製版印刷

定価一、八〇〇円

8393―50176―8909



北海道児童文学全集
第6巻 目次





魔神の海

いないいないばあや

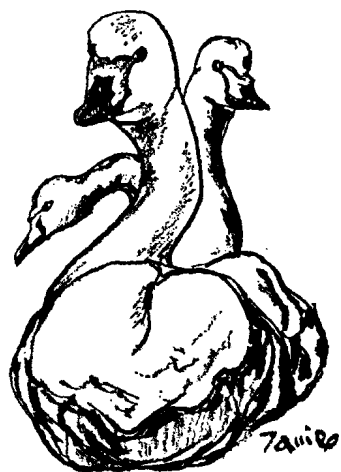
解説

前川
康男
3

神沢
利子
221

笠原
肇
381





魔^ま神^{じん}の^の海^{うみ}

前^{まえ}川^{かわ}康^{やす}男^お

第1章

1 草原のはるにれ

朝の草原を、一人の若い狩人が歩いていった。
見たすかぎりの枯れた草原。

春になったが、山はまだ白く、この北の島には緑も花も見えない。

草原に一本、巨大なはるにれの木がぬっと立っていた。はるにれも、まだ枝に若葉をつけていない。

若い狩人は朝つゆにぬれた草をふんで、その大きなはるにれの木の下にいくと、手に持っていた弓と、肩にかけていた矢の筒を木の根もとにおいてひざまずいた。

——木の神、はるにれよ。——

セツハヤははるにれを見あげて、しずかにいのりのことばをつぶやいた。

——狩りの神、火の神、はるにれよ。わたしは、村の若ものと長い狩りにいっておりました。遠い北の島、ウ

ルツプへらつこをとりに行ったのです。いま、帰ってきましたが、無事に帰って来ることができましたのは、あなたのおかげでございます。らつこをたくさんとってきました。ありがとうございます。――

セツハヤは、心をこめてはるにれにいのつた。

木の皮の織維で織った着物、アツシを着て、その上に白い毛皮の上着をはおっている。靴は、かの皮からだつきはほっそりやせて見えるが、肩はばは広く、たくましい。髪は首すじあたりまでたれ、まゆがこく、目は明るくすんでいる。

――狩りの神、はるにれよ、お願いがあります。どうか、お聞きとどけください。もうすぐ春の弓の日がまいります。島のものが弓をきそう、弓の日に、わたしはぜひ勝ちたいのです。

去年の弓の日、わたしは、最後の的で負けてしまいました。わたしは、あのつぎの日から、ずっと弓のけいこをつづけてきました。どうか勝たせてください。弓の力をおさずってください。わたしは父のような、すぐれた、狩人になりたいのです。父、ツキノエアイノのような、弓のうまい、いさましい男に。――

いのりおわると、セツハヤは大きく腕をひろげ、胸いっばいに風をすい、草の上にごろりとねころがった。朝の太陽がかがやきはじめた空に、尾の白い、おじろわしが二羽、ゆっくりと輪をえがいている。

キ、キツと、おじろわしが鳴いた。

セツハヤの父ツキノエアイノは島の人たちに、「狩りの勇者」とよばれていた。

「弓は、わたしたちの命だ。狩りのために弓の腕をみがけ、弓のへたなやつは男ではない。」

そういって、ツキノエアイノは、毎年、春のすえに弓の競技会を開く。むかしからつづけてきた行事で、弓じまんの男たちに腕をきわせる弓のまつりだった。自分の村だけではなく、島じゅうの男を集めて、その年一番

の弓の勝者をきめる。一番の勝者になることは、狩人にとって、これ以上の榮譽はない。島の男たちは、だれも弓の日の勝者になりたいと願っていた。

去年の弓の日、セツハヤは四十人の競争あいてをぬいて勝ち残り、トマリ村のササクテという若ものと、二人で決勝の的を射た。はげしくせりあったが、最後の的でやぶれてしまった。ササクテは、それまで二度つづけて弓の日の勝者になり、島の若ものの中では、ずばぬけた腕を持っている。

——ことは、ぜひササクテに勝ちたい。——

セツハヤは、はるにれの木の上空を飛んでいるおじろ、わしを、ぼんやりながめながら、弓の日のことを考えていた。土の上にねころんでいると、長い狩りのつかれが大地にすいとられていくようで気持ちがよかった。

セツハヤの住む島の名は、クナシリ。

アイヌ語で「草の島」という。正しくはクナシリ、クナは草で、シリは島である。雑草の多いしげる島なので、クナシリとよんだのだろう。

セツハヤが生まれて、クナシリに十八回冬がきた。若ものは十八歳だった。かれの住むトプト村は、島の南、ラウスという山のふもと、川が海にそそぐあたりにある。村人やく二百。父のツキノエアイノは、コタン（村）の長、村長であった。

——さあ、家に帰って、みんなに狩りの話をしてやろう。——

しばらく会っていない父に会うのがたのしみだった。セツハヤは、弓を引いている父のすがたを思いうかべた。——おとうさんは、だれにも負けない力と、弓の腕を持っている。「狩りの勇者」と、みんながいうように、どんな部族と戦っても負けたことがない。このクナシリを守る勇者だ。ツキノエアイノがいなかったら、島はいまままでに北の島に住む強い部族や、異国の人間どもに荒らされ、うばいとられていただろう……。おとうさんは

どこの家の父親より、ずっときびしい。子どもときからいままで、いくら弓のけいこをしても、一度もほめてくれたことはない。大きく、まや、しかをとってきても、ほめてはくれない。でも……、いまにきつと、おとうさんをびつくりさせてやる。セツハヤ、おまえの弓はすばらしい、りっぱな狩人になった、そういわせてみせる。

村へ帰ろうとしておきあがったとき、セツハヤは山すそのとどまつ、森の中を、すっと走る光のようなものを見た。

「しかだ！」

2 黒い森で

セツハヤは、しかを追って黒い森へ走った。

走るのは、だれにも負けない。追っていくセツハヤも、若いしかのようだった。

しかは、追ってくる狩人に気づいたらしく、木々のあいだをすりぬけるようにして逃げていく。セツハヤはしかの逃げる方向を見さだめ、遠まわりをして、しかを待ちぶせしようと思った。

——あのしかを射とめれば、こんどの弓の日に勝つことができる。——

セツハヤは走りながら、そんなことを考えた。

森を走りまわっているうちに、細い流れのある沢へでた。

「いた！」

しかは、めじかだった。矢を射るには、まだ距離がある。しかは沢の水を飲んでた。セツハヤは足音をしの

ばせて近づいていき、矢筒から矢をぬきながら、しかの神にいのった。

——美しいしかの神よ……。あなたは、太陽のように光る毛皮を着て、神の国からわたしたちの土地におくだりになった。わたしたちに、毛皮と、肉をめぐんでくださるために。わたしたちは、あなたの毛皮と肉で寒さと飢えをしのいでおります。どうぞ、あなたに矢を射ることをおゆるしく下さい。わたしはいつまでも美しいしかの神をうやまい、あなたのたましいを神の国にお送りします。——

だが、ちょっといのりのことが長かった。しかは顔をあげ、セツハヤのほうをちらっと見ると、流れからはなれ、ぱつとひとはねして、くまざさの斜面を駆けあがっていった。

「しまった！」

セツハヤも、すぐあとを追った。沢をのぼり、木立のまばらな明るい場所にでると、遠い木のかげに、かすかに動くものが見えた。

——こんどこそ……。——

むちゅうで走った。

草のしげみを飛びこえようとしたとき、セツハヤは、つる草に足をとられて大きくはね飛んだ。空中でからだをねじって立とうとしたがまにあわず、頭からドサツとおちた。すぐおきあがって、しかを追おうとしたセツハヤは、しかの消えた木立を見て、はっとして立ちどまった。

木立の中に、一人のむすめが立っていた。白い顔の小柄なむすめだった。

——あれ？ このむすめ、人間だろうか。さっきのしかが、人間のむすめにすがたをかえたのでは……。しかのたましいが、むすめに。——

そんな気がした。

むすめが、にこにこわらいたした。手にしらかばの木の皮であんだ、大きなかごをさげている。
「しかを見ませんでしたか。」

セツハヤが声をかけると、

「そう、何か走っていったようだったけど。」

むすめは、わらいながら答えた。

「なにが、おかしい？」

「だって、あなたの中からだが、ぼうんと飛んだんだもの。」

「見ていたんですか。あのしかは、だいじなしかなんです。教えてください、どっちへいったか。」

「そう、だいじなしかなの。あっちのほうへいったわ。」

「ありがとう！」

セツハヤは、むすめの指さした方向へ走った。

まもなく、岩山の下でしかを見つけた。しかは、岩山のがけの下の草の中に立っていた。

—— こんどは、逃がさないぞ。——

セツハヤは風しにもまわり、草の中にかくれて、音をたてないように矢をつがえた。弓を引きしぼり、矢をはなつた。

そのしゅんかん。

ガン！

すさまじい音がした。

ゴン、ゴン……と、その音は山にこだまして、ひびきわたった。

——なんだ、あの音は。——

あたりを見まわしたが、だれもない。

——あの音は、もしかすると鉄砲かもしれない——。

そう思いついた。セツハヤは鉄砲を見たことも、鉄砲の音を聞いたこともなかった。島の人間は、だれも鉄砲を持っていない。

——鉄砲だとすると……、だれか異国の人間だろうか。いや、こんな山の中に、島以外の人間がくるはずはない。——

セツハヤは、しかを追うのもわすれて、異国の人間たちのすがたを思いうかべた。

蝦夷（北海道）に住む日本人。

千島の北の島に住むクリル人。

もつと北のカムチャダル。

さらに北の海のかなたに住むロシア人。

クリル人は、アイヌ系の部族だが、カムチャツカ半島に住むカムチャダル族との混血民族である。

——だれか、島の人間でないやつが、このラウスの山にふみこんでいるのかもしれないぞ。そして、あのしかをねらっているんだ。——

セツハヤは、はっとして、草をかきわけ、しかをさがした。

——矢は、たしかにあたったはずだ。——

しかは、だいぶさきの草むらにたおれていた。

——よかった、これで弓の日に勝てるぞ。——

セツハヤが、そう思って、しかのそばに身をかがめたとき、

「おい！」

うしろから声がかかった。

ふりむくと、奇妙なかつこうの男が立っていた。かさをかぶり、毛皮を着て、わらであんだくつをはいている。

——シサムだ！——

セツハヤは、びつくりして立ちあがった。声をかけた男は、日本人だった。

シは、アイヌ語で「ほんとうの」とか「したい」という意味で、サムは「となりの国の人」「異国人」、つまり、すぐとなりの異国人、日本人というわけである。

——シサムが、どうして、こんな山の中にきているのだろう。——

セツハヤはシサムに、子どものときから、なんどか出会っている。でも、こんな近くで、二人だけで、むかいあったことなどなかったし、しかも、あたりにだれもない山の中での、とつぜんの出会いだったから、セツハヤはすっかりめんくらってしまった。

「おい、聞こえないのか。ぼんやりつつ立っていないで、しかを、こっちへわたせ！」

かさをかぶった男が、大声でどなった。そのことばに、セツハヤは、またびつくりした。男が自分たちのことばでさけんだからだった。

男は鉄砲を持っていた。

「おい、若ぞう！ それは、おれのしかだ。」

セツハヤは、どぎまぎして返事ができなかった。シサムになんと答えていいかわからなかったし、男が手にしている鉄砲が、なんとなくぶきみだったからだ。二人のほかに、あたりにはだれもない。しかをはさんで、セ

ツハヤと男は、じつとにらみあった。

「おい、おれのいつていることが、わからないのか、このしかは、おれのものだ。おれが、この鉄砲でうつたんだ。手をだすな！」

男は草をふみわけて、セツハヤに近づいてきた。あごのはった、日にやけた浅黒い顔の男だった。セツハヤより背は低い。

「いいか、このしかは、おれの鉄砲のたまにあたってたおれたんだ。そこをどけ！」

男のらんぼうなことばに、セツハヤは、むっとして、

「さあ、どっちかな……。しらべてみなければ、わからない。」

と、やっつと、ことばを返した。

「なんだと！ このやろう、ひとの獲物を横どりする気か。」

男はしかをおおっている草を、鉄砲のしりではらいのけた。

「横どりととは、そっちのことだ。たまが、あたっているかどうか、よく見てみよう。」

セツハヤがそういうと、男は足でたまのあとをさぐろうとした。

「いけない！ しかに足をかけるな、しかは森の神だ。」

セツハヤは、どなりつけて、男の足をはらいのけた。

「ふん、なんだと……。しかが森の神だと。何をいいやがる。何が神なもんか、けものじゃないか。おまえたちは、なんでも神、神といいやがる。」

男はそういいながら、いきなりセツハヤの顔をけりあげた。身をよじって逃げたが、男の動きは、思ったより早い。二度、三度とけりつけてきた。セツハヤは、うまくかわした。

男の攻撃をかわしておいて、すばやく、しかの首をかかえた。しかのからだは、まだあたたかかった。

「見ろ！」

しかのからだを返すと、胸にセツハヤの矢がささっていた。ほかには、どこにもきずはない。

セツハヤは、かさをかぶった男に、

「鉄砲のあとはない。」

と、しずかにいった。

「この若ぞうめ、おれにたてつく気か。これは、おれがずっと追いつめてきたしかだ。つべこべいうな。さあ、こっちへ、しかをよこせ。」

「いやだ。」

セツハヤはうずくまったまま答えた。

「このやろう！」

男は、鉄砲をセツハヤの胸にむけた。

「動くと、ぶっぱなすぞ。おれのいうとおりにするんだ。」

セツハヤは飛びのくことも、組みついていくこともできなかった。こしにさげている山刀に手をもっていくこともできない。鉄砲をこんな近くで見たのは、はじめてだった。

「うしろをむけ、若ぞう。うしろをむくんだ。いったとおりにしなければ、おまえの胸にあなをあけるぞ！ すぐ近くになかまも三人きているんだ。」

セツハヤは、しかたなく、ゆっくりと男に背をむけた。

「おれは、こんど、この島にきた万蔵だ。これから、おれが、おまえたちを、びしびしとりしまってやる。よ

く、おぼえておけ！」

男は近くにおちていた、ふとい木の枝をひろい、木のかたさをたしかめると、まうしろから、セツハヤの肩のあたりを、力まかせになぐりつけた。うとうめいて、セツハヤはまえのめりにたおれた。男は、たおれたセツハヤをなぐりつつける。男があごをけりあげた。セツハヤは立ちあがりかけたが、氣を失って、うつぶせにたおれてしまった。

……どのくらい時間がたったのか……、セツハヤは、霧のような、雲のような、もやもやした白いものの中を、もがきながらおよいでいた。つめたいものが、あごにふれた。う、う、う……と、うめきながら目をあけた。

すぐ目のまえに、女の顔があった。

——お、おかあさん。——

そういおうとしたが、声がでない。かすんでいた女の顔が、しだいにはっきりしてきた。若いむすめの顔……、さつき森で出会ったむすめだった。

「氣がついたのね。」

むすめが、ぬれた布ぎれを、セツハヤのあごにあてていた。

「口と、あごが切れているわ。」

むすめはまゆをよせ、心配そうな顔をしている。セツハヤは背中^{なな}のいたみをこらえ、からだをおこそうとした。「どうしたの、こんなひどいけがをして。ドーンって、おそろしい音がしたのできてみたの。すると、あなたがたおれていたんで、びっくりしたわ。」

めまいがして、まだあたりのけしきが、ぼんやりかすんでいる。むすめは、おきあがろうとするセツハヤの肩^{かた}